令和７年度　北海道稚内養護学校

第２回　学校運営協議会

開 催 要 項

期　日：　令和７年 11 月 21 日（金）

時　間：　10:30～12:00

場　所：　北海道稚内養護学校

名　簿

① 学校運営協議会委員

会　長：但　田　勝　義　様　（育英館大学教授）
副会長：今　村　仁　泰　様　（萩見綜合食品センター代表取締役社長）
：守　谷　　工　様　（稚内市生活福祉部社会福祉課長）
：大久保　和　彦　様　（稚内市企画総務部総務防災課防災主幹）
：小　澤　憲　明　様　（稚内はまなす学園施設長）
：末　村　哉　子　様　（稚内市立声問小学校長）
：木　村　泰　優　様　（稚内大谷高等学校教頭）
：佐　藤　　勝　様　（声問町内会長）
：福　澤　直　也　様　（卒業生保護者）
：花　田　弘　志　様　（ＰＴＡ会長）
：柴　田　和千代　　（学校長）

②事務局

・事務局長　：北　原　達　也　（教頭）
・事務局次長：金　木　　清　（事務長）
・事務局次長：平　川　亮　一　（総務部長）
・事務局員　：増　田　朗　久　（寮務主任）
：橋　浦　杏　夢　（舎監）
：宮　本　このみ　（指導部長）
：中　畑　美　記　（支援部進路指導係チーフ）
：福　山　祐太郎　（寄宿舎：庶務部長）
：土　田　保奈美　（寄宿舎：保健地域連携部長）

日　程

	（体育館へ）
10：40	１日防災学校
10：45	防災講話
10：55	体験学習 　Ａグループ：３名（今村さん、木村さん、守谷さん）～平川 　Ｂグループ：２名（小澤さん、福澤さん）　　～増田 　・大久保さん（講師）、末村さん（児童掌握）
11：15	（会議室へ） 開会 ・副会長挨拶
11：18	（１）本日の流れについて（総務部長） 　　・説明 （２）熟議（寄宿舎：庶務部長） 　　『児童生徒の体験的活動における行動力、理解力について』 　　・説明 　　・協議① 　　・協議②
11：58	閉会 ・教頭挨拶
12：00	終了

様式２

学校運営協議会議録

開催日時	令和７年 11 月 21 日（金）　　10 時 30 分　～　12 時 00 分			
会　　場	北海道稚内養護学校（　会議室　）			
出席者数	学校運営協議会委員	９名	教職員	８名
出席状況	但田　勝義（育英館大学教授）	欠席	北原　達也（教頭）	
	今村　仁泰（萩見綜合食品センター代表取締役社長）	出席	金木　　清（事務長）	
	末村　哉子（稚内市立声問小学校長）	出席	平川　亮一（総務部長）	
	木村　泰優（稚内大谷高等学校教頭）	出席	増田　朗久（寮務主任）	
	守谷　　工（稚内市役所生活福祉部社会福祉課長）	出席	橋浦　杏夢（舎監）	
	大久保和彦（稚内市企画総務部総務防災課防災主幹）	出席	中畑　美記（支援部進路チーフ）	
	小澤　憲明（稚内はまなす学園施設長）	出席	宮本このみ（指導部長）	
	佐藤　　勝（声問町内会長）	欠席	土田保奈美（寄宿舎保健地域連携部長）	
	福澤　直也（本校卒業生保護者）	出席		
	花田　弘志（本校ＰＴＡ会長）	欠席		
	柴田和千代（学校長）	出席		

項　目	概　要
１　１日防災学校	□防災講話、体験学習（ベッド・トイレ）に参加していただいた。
２　開会・挨拶	□副会長（今村仁泰氏）による挨拶
３　本日の流れについて（総務部長）	□１日防災学校（講話・体験学習） □熟議「児童生徒の体験的活動における行動力、理解力について」について、説明した。
４　熟議（総務部長） ア．説明	□これまでの取組について、以下の２点の報告をした。 ・交通安全啓蒙活動では、今年度５回目だったが、荒天のため中止。参加者は協議会、町内会、声問小、明治、緑が丘学園など多岐にわたる予定だった。 ・１日防災学校では、合同学習となってから２回目。児童生徒がお互いの様子を知る良い機会であり、災害時には大人も含めた教育効果が期待される。
イ．協議①	□「交通安全啓蒙活動と１日防災学校を今後どう発展的に行うか」協議した。 □交通安全啓蒙活動について ・課題①活動が５年目となり、活動のマンネリ化が見られる。 ・課題②町内会など地域住民の参加が広まらず、集まりにくさがある。 ・提案①新しくできたコンビニエンスストアにポスターを掲示するなど、ＰＲの場を増やし新たな参加者を募る。学校が主体となり企業に協力を依頼する。など、情報発信を強化する。 ・提案②町内会の年間計画を事前に共有し、他の行事との重複を避ける。秋の交通安全運動と町内会の地蔵尊祈願祭と連携する。など、地域行事との連携方法に言及された。

	・提案③高校のボランティア部などと連携し、参加者の拡大を図る。 ●担当部へフィードバックし、次年度に向けて検討を指示する。 □１日防災学校について ・感想①座学だけではなく、体を動かしながら地域の人と交流できる形式は非常に良い。 ・感想②災害時に支援を受けるだけではなく、自分たちも支援できる側になれるという学びは、子どもたちにとって貴重な体験である。 ・感想③多様性の中で活動することの重要性を再認識できた。 ●担当部へフィードバックし、継続して実施を求める。
ウ．協議②	□「地域の力を借りて何ができるのか」について、KJ 法を用い、委員からアイディアを頂戴した。 ・アイディアは次のとおり。 「寄宿舎の余暇」「寄宿舎の外出体験の継続」「買い物（ボランティア）」「一緒に買い物」「町内のゴミ拾いなどのボランティアで交流」「一緒に遠足」「児童生徒によるボランティア隊（除雪）」「教職を履修している大学生との交流」「大学生との交流（授業として子ども達と活動してもらう）」「大学で簡単な映像を作るなどの体験」「地域行事への参加」「夏祭りに学校の学習成果を見せる、販売する」「フリーマーケットや生徒作品の販売活動（ものづくり、販売関係の方と連携する）」「地元ラジオ局に出演し学校紹介等をする」「夕方（ねぎらい）の交通安全運動“お疲れ様、気をつけて”※可能な場所、短時間」「緑のおばさん（交通安全）」「登下校支援」「旗波の場所の工夫（明治通りや緑ヶ丘学園付近）」「教習所協力交通安全」「ボランティアサポートスタッフを募集して学校の取組に協力をいただく」「ふるさとの食（稚内漁業部女性部による料理実演）」「コロナ前活動の復活」「できることを教える側になる取組」「地元出身ミュージシャンの協力による楽器体験」「観光客の歓迎や接遇」「地域の人たち参加の北海道一長い太巻きづくりに挑戦」「いろいろな人と体を動かす場（スポーツ）」「募金活動」 ●ゼロから企画するのではなく、既存の行事や活動を組み合わせ、発展させるアプローチが有効であるとの見解で一致された。出されたアイディアを学校内で共有し、発展可能なものを見つけていく。 ●地域のボランティアを組織化するため、「学校サポーター」制度の立ち上げの話題があった。大学や高校、地域住民からのサポーターを募集し、名簿を作成。学校側はボランティア保険を提供し、登下校の見守りなど必要な時に協力を依頼する仕組み（スキマバイトのボランティア版のような形式）。協力したい地域住民と学校側のニーズをマッチングさせ、win-win の関係を築ける具体的な方法として提案された。
5　閉会・挨拶	□教頭（北原達也）による挨拶